慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	影繪の研究及其資料
Sub Title	
Author	小澤, 愛圀(Ozawa, Yoshikuni)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.1, No.2 (1922. 2) ,p.323- 334
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220200-0323

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

影繪の研究及其資料

言葉といふものは、往々不正確なことがあり、時にまつたく嘘のことがあり、非常に漠然としてあらゆるものを意味することがあり、また、はつきり區別すべきものを、一つに包括することがある。例へば、影繪と一口に言つても、これは決して或る一つの限られた意味ではなくして、その言葉のなかには、種々の違つた內容が含まれて居るのである。

影繪を細別すれば、大體五つに分つことが出來る。第一は、手や厚紙などの影を壁や幕にうつして、人間や動物や其他種々の物體の形を現す遊びである。第二は、日本の所謂『うつしゑ』、西洋の即ち幻燈である。第三は、厚紙や獸皮を切つて人形をつくり、それでいろ〳〵のことを演ずる娛樂である。これは影を見せるのではなくて、人形そのものを見せるのである。第四は、厚紙又は獸皮若くは金屬の板を適宜に切り拔いて造つた小さな人形を、燈の前で操り、その影を幕にうつして見せるところの戲である。第五は、人間が燈の前に立つて其影をうつす所謂 silhouette（シルウエット）である。人間が見物の方に近寄つたり遠ざかつたりするに隨つて、その影は大きくなつたり小さくなつたりする。

かういふ具合に、一口に影繪といつても、各、違つた內容のものを含んで居るのであるから、この言葉は或は妥當でないかも知れない。英語では、Shadow-Pantomime, Shadow-Play, Shadowgraphy などの言葉があるが、中でもシャドウ・パントマイムといふ言葉は、影の默劇といふ意味であるから適當でない。コロンビア大學のブランダア・マシュウス（Brander Matthews）教授は、このことに就いて

精しく論じ、古く用ゐられた Gallantry-show といふ言葉の廢れたことを悲しんで居る。

さて、以上五つのものを更に精しくいふならば、第一は、前にも述べたやうに、單に影法師をうつすだけの遊びであつて、廣重の所謂『かげぼうしづくし』は即ちこれである。英語ではシャドウグラフィといつて居る。

文政十三年に出版せられた喜多村信節の『嬉遊笑覽』に、次のやうなことが記してある。

『嬉遊笑覽（十下火燭）』武林舊事に、影戲爲二繪革社一云々、青藤山人路央にいはく、影戲始二漢武帝李夫人事一、宋仁宗朝、市人有下能談二三國事一者上、或采二其說一加二緣飾一作二人影一、始爲二魏吳蜀戰爭之象一、また因樹屋書影に、書をうつす法を云ふに、嚮レ燈取レ影、以二遠近一爲二大小一、若今人爲レ戲者云々、これ今の影繪なり、洛陽集、春の夜や影人形のはつ芝居　浮石　寛文延寶のころ影人形といひしものは、今も手をうつして影にし、鳥さし、犬の首、鷹などの形をなし、又いさゝか紙など切て其形をうつし、又身にさま〳〵の物をとりつけて、影はしうつすことなどはあり、今の俗子に繪をかきて、彩色したるうつし繪も、予が幼きころより見しものなれど、其頃は今の如く巧みなる事はなく、石臺の花の開く所、又は掛ものゝ白紙なるに、やがて文字のあらはるゝなどにてありし、化物ろうそくなどは今もかはらず、紙を種々の人形に切、二つを竹の串に挿みて裏がへせば、その物かはる、かげ繪は其頃はなかりし。

この書にある寛文延寶の頃（一六六一―一六八〇）の影人形といふのは、即ちシャドウグラフィに當るのである。

第二の『うつしゑ』といふのは、つまり幻燈の一種であるから、西洋から來たものであることは疑ひない。我國ではすでに享和年中（一八〇一―一八〇三）江戸に都樂といふものがあつて、この戲を演じた。

『武江年表』には、次の如き記事がある。

『武江年表七』此年間享和の記事　蔭繪の戲、昔は黑き紙を切拔、竹串を四ッに割て矢羽の如くにさし、行燈に寫して玉藻の前の姿を九尾の

狐に替らし、酒顚童子を鬼にかはらするの類にてありしが、享和中都樂といふ者、エキヤン鏡といへる目鏡を種とし、ビイドロへ彩色の繪をかき、自在に働らかするの工夫をなし、寫し繪と號して見する、是より以來此技行れて次第に巧みになり、其門葉も多くなれり、此都樂、今年嘉永元年七十九才存生して、瀬戸物町に住せり、

初、うつしゑは人物花鳥の働きや景色など簡單なものをうつして見せたのであるが、遂には鳴物囃子を入れて、段物をやるやうになつた。

『皇都午睡』に、こんな記事が載つて居る。

『皇都午睡初編上』座敷影畫

昔より廢らぬ物は、座敷遊びに用ゆる影畫なり、硝子の畫板を逆にはめて、人物花鳥の働らき、近江八景、宮島、金閣寺、天神祭りなど、古風にて品よき弄び也、是も近來鳴物囃子を入、寫畫と呼て、四ッ谷怪談などをす、甚下卑たり、座敷手妻、座敷影畫など、古風なる所を、愛すべきもの也、

『嘉永明治年間錄』に、西洋人が船のなかで影繪をやつて見せた面白い記事がある。

『嘉永明治年間錄二』嘉永六年七月、魯船中にて影戲を檢使輩に見せしむ、

應接方時々往來重りて段々懇意になり、使節云ふ、折能き節慰に我國の影戲を見せ申べしと、或日午後用事有て船に行しに、今日は緩々し繪ふべし、影戲は夜に入らざれば明り取にくしと押留せし故其意に任せ暮るを待、中略扨影戲の時に至れりと云案内に隨て船底に入に、全く黑暗なり、夷人手を取て導入り、暗中椅子にかゝらしむ、頓て一燈を照するに、其燈火暫時の間乍ち明に乍ち暗く、再三して後一圓に明に成たり、其仕掛け我國の如く障子の影に非ず、壓一間計横三間餘に、カナキンの木綿を張、其内に燈を照したり、使節も同じく椅子にかゝりて見物す、彼云、象を見給ひしや、曰いまだ見ず、彼云、然らば象をみすべしと云、其由指揮するに、カナキンの内、一旦眞暗になり、良有て我國にて幕明の拍子木を打べき樣の時、ガタ、と音して、二間計の大象歩み出たり、耳目鼻口四

脚頭尾の運動、眞に活るが如し、次に一轉して彼國の女子の姿を幻じ出す、又一人の男子有て狎戯るさま、彼國の者にはをかしかるべけれども、我等には不口にて、左までをかしとも思はれず、都て鳴物等は只ガタ〳〵と木を鳴し、我國の所ゝ謂口上はいへども、是又眞のチンプンカン也、一落して次に草木禽獸を現ず、草花乍ち生じ、乍ち長じ、花の開落或は實を結び、其實の熟脱、樹葉の榮枯、四時一彈指の中に移り、所ゝ謂壺中の乾坤、身を仙境に置が如し、彩禽奇獸、細鱗小虫、或は飛び、或は躍り、浮沈振劣の形狀は其眞に逼る、只皷吹の聲なきのみ也、扨結局に至り、我朝の海防砲臺を一覽に供ふべしと云、其光景數百歩の臺場、各左右相對して、備へたる、其大小は有といへども、必一雙にて片隻の物なし、西に折り東に伸び、生布羅列す、中略 思ふに今日影戯の一事、此一段を示して一唱に傳ん爲なるべし、見畢て歸る。

幕末の頃、兩川船遊と云ふうつしゑ師があつた。川遊びの頃、鶴や龜やといふ屋形船を隅田川に浮べてこの戯を傳へ、その子孫は、今日でもなほ存して居る。今の結城孫三郎は即ちそれである。併し、此種のうつしゑは、中に隨分下卑たものや卑猥なものがある。例へば、玉川文樂の『兩國花火』の如きは、殆ど春畫に近いものである。併し、スクリインの上に現れた映畫の纖細な運動は、これを演ずるものの伎倆によるのであるから、普通の幻燈や活動寫眞の如く機械的のものではなく、隨つて一種の藝術品たることは無論である。

昨年、初夏の候、塾の劇研究會主催で影繪の會を塾の構内に開いた折、見物に學者文人が少くなかつたが、この催しは研究上少からぬ參考となつたことと思ふ。

第三は、影繪といふよりは寧ろ人形芝居であるといつてもよい。瓜哇の人形芝居は、今日でも世界で名高いものであるが、この人形芝居を影繪の一種と見れば、これは第三第四の部類に屬すべきものである。瓜哇では、古代の習慣に從つて、男女の見物席が別になつて居る。男子は幕の前に坐つて人形芝居を見、女子は幕の後に坐つて人形の

影を見るといふ變つた形式である。この男女の席が別れて居るといふことは、どの書にもあるといふ譯ではないが、一九〇五年に倫敦で出版せられた Augusta De Wit の "Java" といふ書のなかにそのことが記してある。

According to ancient custom, the men sit in front aud see the puppets; the women have their place behind the screen, and look on at the play of the shadows.

我國ではこの種に屬するものは、極めて單純なものである。江戸時代の見世物の遺物の一である ことは疑ひないが、今日でも、時折各所の緣日や祭禮などで見かけることがある。大正四年の四月、芝の增上寺に東照宮三百年祭が行はれた時、珍しくも、子供の心をひくやうな繪看板を掲げた小屋掛のうつしるが二つ出て居た。どちらの見世物にも、子供が三四人しか入つて居なかつた。僅か一錢の木戸錢で、年取つた見世物師の女房が木戸番を勤めて居た。聲色鳴物入で、厚紙を種々の人形に切り、それを竹の串ではさみ、硝子につけて動かすのである。人形には彩色がしてあつて、裏がへすと變化した。どちらの小屋でも『西遊記』をやつて居た。一方の小屋では、また、山賊退治などをもやつて無邪氣な子供たちを喜ばせて居た。

第四は、ほんたうの影繪である。これは、前にも述べた如く、厚紙又は金屬獸皮を適宜に切り拔いて造つた人形を、燈の前で操り、その影をうつして見せるところのものである。前に擧げた『武江年表』の最初に記してある種類のものも、これに屬するものと見ることも出來るが、この戲は今日では見られない。外國では東洋でも西洋でも隨分發達して居るやうに思ふ。今私の手許にある獨佛始め支那、暹羅、緬甸、瓜哇、土耳其、亞剌比亞、埃及、北阿弗利加等の影繪の書を見ると、いづれも其國々の特色が出て居て面白い。

この影繪は、佛蘭西では、百年以上も前からポピュラアなものであつた。その起原を尋ねると、十八世紀の頃、セラファン(Séraphin)と呼ぶ一人の興行師があつたが、この人は、小さな舞臺を拵へて、今日でもなほ子供の間に原名の儘で傳へら

れて居るかの『裏れ橋』(Pont Cassé)といふ面白い芝居をやつて、當時宮廷に於ける可憐な少年少女たちの愛顧を受けたといふことである。

一七五九年の大藏大臣の名前をとつたシルウエットが當時流行して居たといふところから、この見世物も或はそれから出たものではないかといふ說もある。とにかく、セラファンが巴里の少年少女たちを喜ばせたのは、一七七〇年代のことであつた。

佛蘭西の影繪は、初はオムブル・シノアアズ(ombres chinoises)と呼ばれて居た。これは英譯してChinese shadowsといひ、日本語に文字通り譯すれば『支那影繪』といふことになる。

セラファンの後、一世紀ほど經つて、即ち十九世紀の中葉後、ルメルシエ・ド・ヌウヰル(Lemercier de Neuville)といふものが、關節のある器用な黑人形(パピッチ・ノアアル)(Pupazzi noirs)を考案した。彼は、また、是等の人形の演ずべき、自作の小戲曲を集め、その演出の方法と秘訣とを加へ、五十枚ほどの挿繪を入れて出版したといふことである。併し、ヌウヰルは、佛蘭西の影繪に新生面を開いたといふのではなく、要するに、前人のやつたことを受け繼いだに過ぎなかつた。即ち、其背景を複雜にし、人形の數を殖して、芝居を一層效果あるものにしたとはいへ、演出の原則に於ては少しも變りはなかつたのである。

カラン・ダシュ(Caran d' Ache)に至つて、佛蘭西の影繪に新機軸を出した。彼は、その人形をオムブル・フランセエズ(ombres françaises)、即ち『佛蘭西影繪』と呼び、人形に關節をつけることをやめた。少くとも、極めて稀な場合の外は、これを應用しなかつた。彼は、不動(イモビリテイ)の效果を認めて、前人が會て試みなかつた新しい原則によつたのである。で、獨得の遠近法を用ゐて、軍隊の行軍のさまなどを見せ、なるべく白(せりふ)を言はないやうにした。殊に、得意としたのは、奈翁の勇ましい物語であつたが、その巧妙な技巧は、文藝批評家たる彼のジュウル・ルメエトル(Jules Lemaître)をして、『この沈默の詩は佛蘭西文學に於ける唯一の叙事詩である』とさへ激賞せしめた程であつた。

カラン・ダシュは、かく遠近法を巧に應用して、この藝術の完成を計つたが、併し、それに達するまでには、なほ一つのことが殘つて居た。それは背景に色彩を加へることであつた。アンリ・リヴエエル（Henri Riviere）は、普通の燈の代りに幻燈を用ゐて、適當な色彩のある背景を幕の上に現した。なほ、彼は、其背景を隨時變化するために二つの幻燈を併用した。リヴエエルは、單に發明家であつたのみならず、また、想像の力に富んだ眞の藝術家であつた。この豐な想像力の結果、彼は、自己の新奇な方法によく適した二三の戲曲を見出した。『さまよへる猶太人』（Wandering Jews）や『放蕩息子』（Prodigal Son）や『聖アントニイの誘惑』（Temptation of Saint Anthony）などの物語が、即ちそれである。是等の戲曲は、いづれも、みな、演劇的であると同時に、繪畫的味ひを有つた興味ある物語である。併し、この新しい方法によつて演出したもののうちで、最も效果のあつたのは、かのスフィンクス（Sphinx）で、影繪固有の扁平な人形と、カラン・ダシュが用ゐた遠近法の利益とを、幻燈應用の背景變化に巧く結び合せて成功したのが、この芝居である。佛蘭西の影繪は、リヴエエルによつて遂に藝術的に完成せられたといつてよいのである。

影繪の範圍は狹いものであつて、單に少年少女たちの心を喜ばすに過ぎぬものの如く見えるが、佛蘭西人の生來の藝術的衝動は、極めて發達した美的感覺を有つて居る巴里の好劇家をも滿足せしむるまでに、この戲を發達せしめたのである。かの高尚な希臘の悲劇が都に遠い片田舍の祭禮から發達したやうに、又、近代劇が中世の宗教劇から進化したやうに、セラファンの單純な影繪は、後になつて巴里の藝術家にこれを完成せしむる基礎を造つたのであると、ブランダア・マシュウス教授は言つて居る。

以上佛蘭西の影繪に就いては、ブランダア・マシュウス教授の著書に據つて、大略述べたのであるが、氏は、"A Book about the Theatre" の第十八章 Shadow-Pantomime, with All the Modern Improvements の項に於て、その研究を發表して居

る。

併し、佛蘭西の影繪に就いて更に精しく述べたものは、Ernest Maindron の "Marionnettes et Guignols" 中の佛蘭西の影繪に關する數章である。マンドロンは、この書に於て、佛蘭西の影繪なる條目を特に設けて居る譯ではないが、セラファン、ルメルシエ・ド・ヌウヰル、シャ・ノアアル等に關する數章に於て、佛蘭西に於ける影繪の發達に就いて可なり精しく論じて居る。ブランダア・マシュウス教授の論文は、この書から少からぬヒントを得たものであることが知られるのである。

歐羅巴に於ては、佛蘭西の外獨逸其他の國に於ても影繪は存して居る。殊に獨逸には影繪の研究に關する多くの論文が出て居る。それには東洋諸國若くは亞剌比亞の影繪に關する論文などがあつて、參考となるものが少くない。例へば、一九一〇年十月發行第二冊目の Bühne und Welt に出て居る von Herm. S. Rehm の Das Schattentheater der Orientalen の如きは、東洋諸國に於ける影繪に就いて述べ、土耳其、亞剌比亞、暹羅、緬甸、瓜哇、支那等の書迄挿入してある。併し、その記述の上に多少の誤謬あるを免れない。

京都大學の濱田青陵博士の『希臘紀行』のなかに、希臘の影繪のことが見えて居るが、影繪は、今日でもなほ同地方の民衆の娯樂となつて居ることが分る。

我は羅馬にあるの日、コロセウムの遺墟に滿月を見て無限の感に打たれたが、今は此のアクロポリスの明月に對して、更に一層の感想に囚はれざるを得なかつた。低徊又冥想、あゝ此の良夜を月と共にアクロポリスに明さんか。

岡を降つてオデイオンの傍に出づると、此處には夕涼の人が黑く一團になつて影繪を見て居る。活動寫眞の此の時代に――我等の宿の前の廣場では丁度野天の興行をやつてゐる最中――昔ながらの此の影繪も中々に面白い。而かも之に附いてゐる聲色は、丁度日本の浪花節ソックリの調子なるに、しとゞ興を覺えて暫く立止つてゐた。

影繪は、その發祥の地がいづれにあるか、これを

正確に知ることは容易でないが、その趣味の點からいつても、普及の點からいつても、東洋のものであることは疑ひない。佛蘭西に於て、初これを支那影繪（オムブル・シノアズ）といつたのを見ても、東洋から輸入したものであることが分る。隨つて、この戯は、亞細亞に於ては早くから到る處に普及し、今日でもなほ行はれ居てるところが少くない。

亞剌比亞、土耳其、シリア、北阿弗利加等回々教國に於ける影繪は、往昔、瓜哇から傳つたものであるといふ說があるが、この事は、ケンブリッヂの碩學キリアム・リッヂエエ（Sir William Ridgeway）先生の著 "The Dramas and Dramatic Dances of Non-European Races" 中の瓜哇の條に記されてある。又、フィレンツェのゴルドン・クレエグ氏やジョン・セマア氏等によつて發行せられたマリオネット誌には、埃及の行商人や、北阿弗利加の囚人や、馬上の人物や、軍船などの影繪人形の興味ある挿繪がある。

上記の諸國に於ける影繪は、Karagoz といひ、阿弗利加に於ては Karakusch と名づけ、極めてポピュラアなもので、ラマダンの月（回々教暦第九月）や神社の祭禮などによく見られるといふことである。佛蘭西の文豪ゴオチエ（Théophile Gautier）も、Karagheuz に關する一文を草して居る。この戯は、通例カフェエなどでも行はれ、夕暮から暗い部屋のなかで演ぜられるのである。舞臺には、先づ幕を張り、その後にはオリヴ油で燈を點し、その燈の前に、Hajaldshy 即ち演者が坐つて、人形を操り、其影を幕にうつすのである。Hajaldshy は、印度の所謂 Sutradhara, 瓜哇の所謂 Dalang に相當するのである。人形は、駱駝又は其他の獸皮で作られ、その人形は鑵鼓や笛の音につれて、歌をうたひながら幕の上に現れるのである。其主役は無論 Karagoz である。劇の內容に就いては、リッヂエエ先生の著書中に精しく記してあるから、此處には省くが、とにかく、この人形が、瓜哇の Wayang Purwa, 印度の Vidūsuka, 波斯の Pahlawan, 歐羅巴では、英吉利の Punch, 獨逸の Pikelherring, 墺地利の Kasperl, 佛蘭西の Guignol, 露西亞の Petrochka 等の種類に屬するものと見て差支ないのであるから、

是等のものと比較して見ることは、民俗學其他此方面の研究に參考となる點が少くないと信ずる。

瓜哇の影繪のことは、前にも少し述べて置いたが、瓜哇では、芝居のことを一般に"Wayang"と稱して居る。ワヤンのことは、前記の諸書の外、瓜哇に關するものや未開人の演劇に關する書籍には必ず記されてある。マリオネット誌中の瓜哇の芝居に關する論文や、E.R.Scidmore の"Java"には、人形芝居を演じて居る挿繪まで入つて居る。併し、精しく研究せむとするものには、前記リッヂヰエ先生の著書及エエル大學シェッフィイルド理學機人類學及地理學教師 Loomis Havemeyer の"The Drama of Savage Peoples"が最も便利であると思ふ。ワヤンにも種々あるが、影繪に屬するものは即ち Wayang Purwa である。これは極めて古いものであると同時に、今日でも、ポピュラアなものとなつて居る。その人形は、獸皮で造られ、彩色した金ピカの極めてグロテスクな感じのするものである。此外瓜哇には木の人形もある。是等の實物はブリティシュ・ミュジイアムを始め世界到る處の博物館や大學の人類學考古學教室に陳列せられてある。私の書齋にも十數箇の瓜哇の人形が壁にぶら下つて居る。いま、劇の內容に就いて細に記すことは煩しいから、其概略を知りたいと思ふ人の爲に、Augusta de Wit の著書より抄錄すれば、

There are several kinds of "wayang," each having its own range of subjects and style of acting; the most ancient as well as the most popular, however, is the "wayang poerwa", the miniature stage on which the lives and adventures of Hindoo heroes, queens, and saints are acted over again by puppets of gilt and painted leather, moving in the hands of the "dalang", who recites the drama.

The "wayang poerwa" is best described as a combination of a "Punch and Judy" show and a kind of "Chinese shadows".

支那に於ても、影繪は、すでに漢代から存して居たと書に見えて居る。かの燕京歲時記には、影戲の說明や、影戲に就いての面白い詩が載つて居

る。この戯は、我國と同じやうに、今日では殆ど廢れて、容易く見られないが、詩人や藝術家を喜ばすやうな空想的な極めて洗錬せられたものである。英吉利の藝術家であるバアナアド・リイチ氏は嘗て北京在留中、影繪を見、その印象を細に記して私の許に送つてくれたが、氏は、これによつて非常な深い印象を受けたことを述べ、その效果をわが能と比較して論じて居る。その寫眞やバアフォオマンスの模樣を記したもの迄送つてくれたが、それを見ても、支那の影繪の如何に勝れたものであるかを容易に想像することが出來る。

最後に、第五のシルウエットのことを一言述ぶれば、これは前にも言ふ如く、人間が燈の前に立つて其影を映す戯である。一七五九年の佛蘭西の大藏大臣の名前から出た言葉で、初は黑色半面影像のことを言つたのであるが、遂には全身をうつすことまでいふやうになつた。佛蘭西では一時流行したといふことで、これは、西洋でも日本でも、實人芝居に應用せられることがある。先頃亞米利加に於てもシルウエットの芝居が流行して居たやうなことが同地の雜誌に出て居た。

影繪に關する記錄は、本文に大略述べて置いたが、筆を擱くに當り、參考のため一括して次に掲ぐることとする。

古事類苑　樂舞雜載　影繪の條　拙稿

影繪の研究　大正十年五月二十日及二十一日發行東京日日新聞所載

影繪の話　大正十年八月發行中學世界所載　畑耕一氏

影繪の會　大正十年六月十二日發行東京日日新聞所載

支那影繪芝居の一夜　バアナアド・リイチ氏
千九百十八年九月十四日――廿五日附
バアナアド・リイチ氏より小生に宛てたる書簡
右の書簡は同年十月十五日發行英文雜誌『新東洋』に掲載せり

人形及人形芝居の歷史に關する文獻　拙稿
慶應義塾大學文學部史學科發行『史學』創刊號所載
右に掲げたる書中には影繪に就いて記したるもの少からず

佛蘭西の影繪　拙稿

Brander Matthews. A Book about the Theatre. New York. 1916.

Sir William Ridgeway. The Dramas and Dramatic Dances of Non-European Races. London. 1915.

Helen Haiman Joseph. A Book of Marionettes. New York. 1921.

The New International Encyclopaedia. New York.

The Encyclopaedia Britannica. Cambridge.

The Marionnettes. Florence.

Bernard Leach. A Night at the Chinese Shadow Play. New East, 1918.

Ernest Maindron. Marionnettes et Guignols. Paris. 1900.

B. Melchers. Chinesische Schattenschnitte. (124 Chinese shadow-pictures collected in Tsina-fu) 1921.

Pisko. Licht und Farb. Munich. 1876.

Champfleury. Le musée secret de la caricature. Paris. 1888.

Nuveau Larousse Illustré. Paris.

von Herm. S. Rehm. Das Schattentheater der Orientalen. Bühne und Welt; Oktober-Heft 2-1910.

G. Jacob. Bibliographie über das Schatten theater. Erlangen. 1902.

Clemen Huart. Ein arabisches Karagöz-spiel. Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft. Bd. 54.

E. Littmann. Arabisches Schattenspiel. Berlin. 1901.

(大正十一年三月十七日稿)

小澤愛圀